

ボリアと日本をつなぐ企業・団体情報

**1. ボリビアに銘木を求めて：
北三株式会社**

代表取締役社長 尾山 信一
SUTO LTD. 代表 古田 芳昭

1. 世界中に銘木を求めて

私共の会社、北三(ほくさん)株式会社(本社東京新木場)は、世界中で買い付けた銘木を薄くスライスした突板(ツキイタ)を生産しております。当社は北海道で履物店を営んでいた創業者の尾山金松が下駄の材料を求めて入った雪解けの山で偶然見つけたタモの玉杓の美しさに感動し、この時の思いが当社の創業に繋がりました。その後突板と出会い、その将来性を確信し関東大震災の翌年1924年に東京芝に店舗を建て突板の販売を開始して以来、今日まで「大自然が作り出した木目の美しさを通して暮らしの中に寛ぎや安らぎをお届けしたい」という思いを大事にしてやってきました。

「突板」という言葉は馴染みがない言葉だと思いますが、木目や柄が美しい、いわゆる銘木を大きなカンナのような機械で0.2mm~0.5mm程度の紙のような薄さにスライスしたものが突板です。突板はこのままの薄い状態では使用することは出来ませんが、これを合板・金属・ガラスなどの安定した基材に貼り合わせることで、木材が本来持っている「反る、割れる」というような欠点を最小化することができます。

現在、突板は様々なものに貼り合わされ、家具・楽器などの表面や住宅・ホテ

ル・ホール・自動車・列車などの内装の化粧材料として使われております。



写真1-1 突板が使用されたコンサートホール



写真1-2 高級車の内装にも使用される突板



写真1-3 ななつ星in九州に採用された全車両の天井、壁に当社の突板が使用されています。

Design by Eiji Mitooka + Don Design Associates

材種についてですが、当社はもともとタモ杓や黒柿など和家具に使われる国産材を手掛けていましたが、生活様式の変化と共に洋家具が広まるにつれて、どん

な木でも面白い木目や柄があれば家具の表面材として使って頂けるようになり、当社は海外での新材開発に力を注ぎました。日本で銘木と言えばケヤキやヒノキをすぐに思い浮かべますが、海外ではチーク、マホガニー、ローズウッドを始めとしてたくさんの銘木があります。当社がこれまで世界中から探し求めた銘木は300種類以上に達します。

2. ボリビアの銘木を求めて

さてそんな私共とボリビアとの繋がりは今から55年ほど前に遡ります。1960年代後半に当社はブラジルにおいて銘木中の銘木と言われていたJACARANDA(現地名ジャカラランダ、国内名ブラジリアンローズウッド)の原木の買付を行っていましたが、サンパウロ近郊のサントス港の置き場でMORADO (現地名モラード、国内名パープルウッド) という、木目が美しい紫檀系の木に出会ったのがそもそもの始まりでした。一目で木口(こぐち：丸太を輪切りにした断面)から見える縞模様の美しさに魅せられた買付担当者が出場所を探したところ、ボリビアのサンタクルスより貨車で運ばれたことが判り、さっそくサンタクルスに行き、木材屋を廻りMORADO原木の買付が始まりました。

その後、ブラジルとボリビアで相次いで原木での輸出が禁止になったことから、1972年にブラジル タウバテ市にNORTRES(ノルトレス)社、そして1974年にボリビア サンタクルス市にSUTO(スト)社という突板生産会社を設立し、日本へ

の突板輸出が始まりました。この二つの会社には、当社の社員に加え、海外移住事業団からの紹介者など合わせて15名の方が永住権を取得して赴任しました。

ブラジルに設立した会社のNORTRES社の社名がポルトガル語のNORTE (北) と TRES (三) を掛けて命名したのに対し、ボリビアに設立したSUTO社の社名は、嘗てサンタクルス市が造られた発祥地 (現在の場所より220km東にある現在のSan Jose de Chiquitos) の地名「SUTO」から来るものであり、豊富な湧き水が末広がりに町に流れ込み、とても縁起が良いことから、社名として名付けました。

3. ボリビア政府より伐採権を取得

1974年のSUTO社工場の竣工式には当時のウゴ・バンセル大統領にもご臨席頂いた事から、同社で生産している銘木の中にはこの大統領の名前を頂き、“バンセルローズウッド”と名付けて、日本で販売した材種もあります。



写真1-4 当時のウゴ・バンセル大統領も臨席した工場の竣工式



写真1-5 伐採後の長さ切り



写真1-6 製材されるモラード (MORADO) 原木



写真1-7 突板にスライスされるMORADO



写真1-8 突板の乾燥

SUTOの設立から数年後、山で原木を伐採し取得する権利である伐採権(コンセッション)を国から取得し、現在サンタクルス市より鉄道沿いに西に向かって約500km走ったSanta Anaという町の北部の山に5万ヘクタール(ha)の伐採権を所有しています。

木材の伐採といえば不法伐採や環境破壊などマイナスイメージが先行しがちですが、ボリビアの森林法はコスタリカの森林法を模して作られており、森林の持続的更新という点で、環境に配慮した非常に合理的な法律だと言えます。ご理解頂くために展示会等で使用しているパネル説明を次ページに示します。

4. ボリビアの木材ビジネス環境について

SUTOは1975年にサンタクルス県庁が造成した工業団地に、パイオニアとして最初に設立されました。現在ボリビア国内で使用されている殆どの木材は国内の自然林から供給されています。合板の材料となる成長が早く柔らかいセレボ(cerebo

や、鉾山の落盤防止の坑木に使用するユーカリ(eucalipto)やチーク(teca)などの材種の植林もされていますが、まだまだ規模は小さく需要量を満たすには足りない現状です。

ボリビアでは、大手合板メーカーや製材会社など数社が、政府から伐採権を取得して立木を伐採しており、当社もその中の1社で、約50,000ヘクタールの伐採権を保有していることは前段で述べた通りで

す。

実際に伐採する為には、立木のある場所をGPSで測定して地図を作成し、その他必要書類と共に伐採許可申請書に添付して審査を受けなければなりません。申請してから許可を取得するまでには相当な時間と手間と費用が掛かります。

現在ボリビアでは政府の政策により従業員の賃金は毎年上げなければならない、コストアップの要因となっています。また

更新森林

Forest Conservation

北三はボリビア東部の山林に5万haの伐採権を所有しています。伐採エリア内の立木位置は1本ずつGPSで測定され、樹種名や直径・高さ等のデータを現地で収集、伐採木を選定しています。樹種毎に伐採可能な直径が定められており、それに満たない木はそのまま残して20年後のタイミングを待ちます。その他ボリビアの森林法に従い、厳しい管理の下、循環型の原木調達を行っています。



伐採計画



区画調査



データ収集



天然更新



伐採



伐採木・種木の選定

★ボリビアの森林法・・・「森林の自然環境保護(動植物を含め)と持続的な木材活用」を目的とし、その基本方針は「天然更新」。つまり自然に落ちる種から新しい木が育つか＝森林の力にゆだねている。

- 自然保護のため、森林内での狩猟や釣りを禁止
- 森林局の承認を得る為、毎木調査を行い伐採計画書を提出する
- 年間に伐採できる面積は所有するエリアの総面積のうち5%まで
- 各樹種とも、伐採条件に見合う原木のうち、20%は種木として残す
- 伐採後20年間はそのエリアでの伐採は禁止

などが義務付けられており、伐採管理や天然更新を促すためのルールが徹底されている。

図1 環境に配慮したボリビア森林法に沿った伐採

石油公団の生産減により天然ガスの輸出が減少している一方で、ガソリン・軽油は輸入に頼っており、加えて大豆、砂糖や牛肉の輸出規制（つい最近解除）もあり、外貨不足の状況となっています。為替は1ドル=6.96bsに固定されているものの、現在、銀行ではドルでの支払いは受け付けておらず、その影響で闇レートでは1ドル8.5bsとなっています。その為、薬品や日用雑貨、建築用の鉄筋、そして車の部品や完成車など、輸入に頼っているものの物価が高騰しています。このような中、木材の伐採から生産・出荷に関わる一連のコストも増加しており厳しい状況となっています。

木材市場についても、ボリビア国内は不景気のなか低迷しており、また輸出についてもウクライナやパレスチナ問題に加えて中国経済の低迷もあり、輸出額は前年度比25%減という状況となっています。

一方、当社が生産する突板の市場は主に日本や米国など海外がメインであるため状況は異なりますが、突板は化粧材として使われるため、ファッションと同様に、色や柄の流行の影響を受けることが多く、市場の動向を意識してニーズに合った材種を提案していかなければならないという苦勞があります。

このような状況の中ですが、SUTO LTD.はおかげさまで今年設立50周年を迎えました。振り返れば本当にさまざまな出来事がありましたが、なんとか皆さま方のご協力を頂き、今日までやってくる

ことが出来ました。

現在、世界的な環境保護などの流れにより、木材についても丸太での輸出禁止など規制が厳しくなっていますが、しっかりした森林法によって管理された森林から出材されているボリビア材については、まだまだ世界に知られていない材種も多くあり、今後ますます貴重な資源と評価され、市場が拡大されると確信しています。現状の経済環境は大変厳しい状況ですが、これを乗り越えて更に進んで参りたいと思っております。

(終わり)



写真1-9 ボリビアのMORADO突板を使用したピアノ

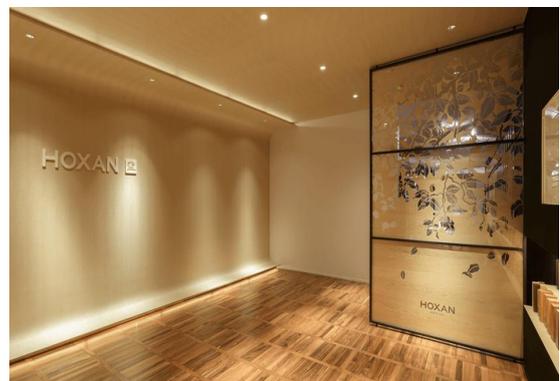


写真1-10 突板に関する情報満載の当社ショールーム



写真1-11 写真1-3と同様、ななつ星in九州に採用された全車両の天井、壁に当社の突板が使用されています
Design by Eiji Mitooka + Don Design Associates



写真1-12 内装に突板がふんだんに使用された店舗

当社のホームページは以下の通りです。
<https://www.hoxan.co.jp/>

<https://www.hoxan.co.jp/english/company/>

※当社ショールームをご見学の場合は予約をお願いいたします。

2. 初のアフリカ大陸・・タンザニア滞在記 (その4)

一般社団法人日本ボリビア協会
常務理事 上崎 雅也

1 スポーツとジェンダーギャップ

2018年5月に、タンザニアに着任した頃は、まだじっくり国民生活を観察する余裕がなかったのか、子供たちが集団で遊ぶ姿を見たことが殆どなかった。中南米ではどの国でも子供たちが街角や空地でフットボール、バスケットボールなどに興じる姿が目に入るが、着任後2か月間、まったく目にしなかったのも、この国には、スポーツ文化が存在しないのかとすら感じた。

生活するうちに、スポーツしない訳ではないことは分かってきた。ドドマに引っ越してきてひと月経った頃に、女子も混じり、子供たちが裸足でサッカーに興じる姿に出会った。その後、事あるごとに、タンザニアでのスポーツ事情をタンザニア人に訊いてみたが、概ねこんな所だ。

① タンザニア人が一番好きなスポーツは、サッカー、二番目は、バスケットボール

確かにケーブルTVでもサッカー専門チャンネルは多いし、2018年のワールドカップ期間中は、ホテルのバーで観戦する人が大勢いた。アメリカのプロバスケットボールリーグ (NBA) には、ナイジェリア、コンゴ共和国、カメルーン、セネガルなど、アフリカ出身の選手が増えている。2018年7月には、ナイジェリアでNBAがアフリカ出身選手を派遣して子供たち

に、バスケットボール教室を開いたとのニュースも耳にした。学校には、それなりの設備や道具もあるので、子供たちが学校などでスポーツをプレーしない訳ではない。ただ、農村部では、裸足の子供が多いので、学校の外で遊ぶときはサッカーボールを思い切り蹴れないといった気の毒な事情はあるらしい。

② 女性のアスリートを発掘するイベント開催

そんなある日、1980年代に日本マラソン界のエース瀬古俊彦氏と名勝負を繰り広げた伝説のマラソンランナー、ジュマ・イカンガー氏とお会いして話す機会があった。彼は、JICAタンザニア事務所の広報アドバイザーを務めていたが、私の着任半年前の2017年11月に、JICAの技術支援案件として「Ladies First」というスポーツイベントを実施したそうだ。普段スポーツの機会のないタンザニア女性にスポーツの機会を提供するだけでなくアスリートの卵を発掘する目的の「記録会」の意味もあったらしい。

関連記事を当時のJICAのHPから引用させて頂く（イタリック体部分）。一部旧聞があるので筆者が補足追記した。

男子の有力陸上選手を輩出しながら、女子選手の活躍の機会が少ないタンザニアの状況を変えるきっかけにと、JICAは2017年11月25、26日の2日間、タンザニア情報・文化・芸術・スポーツ省と共催で、同国で初の女子選手を対象と

した陸上競技会「LADIES FIRST」をダレスサラームの国立競技場で開催しました。



写真2-1 1万メートル走で競う選手たち

「タンザニアでは、スポーツは男性のものという固定観念から、女性は陸上競技大会の出場機会が限定されているのです」と指摘するのは、JICAタンザニア事務所の広報アドバイザーで、1984年と86年の東京国際マラソンで優勝し、ロサンゼルス、ソウルの両オリンピックで入賞するなど1980年代に活躍したタンザニアの元マラソン選手、ジュマ・イカンガー氏。



写真2-2 大会で挨拶する元マラソン選手イカンガー氏

女子の陸上競技大会を通じて、女子も男子と同等の機会が与えられる社会の実

現に向け、JICA はイカンガー氏と協力して、この競技会を企画しました。

総勢 105 名の選手が参加し、日本の民間企業も支援しました。競技会では、100 メートル走や 10000 メートル走、やり投げ、走り幅跳びなど 11 種目が行われ、各州から選抜された合計 105 人が参加しました。2020 年に東京で開催されるオリンピックに向けた公式記録会との位置づけです。

イカンガー氏は「タンザニアの体育の授業は、ほとんどが講義。実技が少ないため、体育教育の推進に向けた JICA のサポートに期待しています」と語ります。JICA はスポーツをきっかけに、タンザニアでの女性の社会地位の向上を推進していきます。

こうして、あのイカンガー氏は、瀬古氏とのライバル関係から生まれた日本との強い絆の中で、JICA を窓口として社会活動を続けておられた。イカンガー氏の言葉の端々から実直な人柄が伺えたが、彼との会話の中で私の胸に響き今でも忘れない言葉がある。

「瀬古さんとは、レース前も、レース中も、レース後も、ずっと友達でした。」

聞き流せばそのままだが、何という深み、滋味のある言葉だろう。「レース中も」という表現に私は、ライバル瀬古氏への友情のみならず、深い畏敬の念を感じた。今でもお二人は、友人関係で、瀬古氏はマラソンを引退後、タンザニアを何度も訪れ、その度にイカンガー氏が各

地を案内しているらしい。イカンガー氏も日本を何度も訪問されているそうで、ちょっと良い話ではないか。

③ タンザニアのジェンダーギャップ数

タンザニアは、男女格差を表した「ジェンダーギャップ指数」で2015年当時、世界188カ国中159位と低位で、格差是正が求められていた。「Ladies First」が誕生した背景には、この問題が存在したが、2023年にタンザニアは、何と48位までジャンプアップした。これには、2021年に女性大統領が誕生したことが大きく影響していると思われるが、もともと政治経済分野での女性の上位管理職進出比率は、日本よりも高い国であった。

日本は、逆に2023年は125位とそれまでの110位台から低下、ボリビア（44位）だけでなく、他の中南米諸国の後塵も拝している。万年低位にある理由は、明らかに国会、地方議会における女性議員の少なさと、経済界における経営陣への登用の低さが理由だと思える。高い地位にある男性の「失言」も相当足を引っ張っているような気がする。

2017 - 18年当時は、2020年の東京オリンピック（コロナの影響で実際は2021年に実施）に、何とか女子陸上選手を送り込みたいと関係者が尽力されていたらしい。ただ、JICA関係者から聞いた話では、長距離走や跳躍の技術を学んでいない（経験がない）為に、強い選手を輩出するにはまだまだ時間がかかるようだ。これまでケニアやエチオピアからは日本の高校、

大学に多くの留学生が来日したが、現地の学校で技術指導する日本人が存在しているからできたらしい。確かにタンザニアの留学生が箱根路を走っている姿は、目にすることがない。

因みに東京五輪に参加した選手数を調べてみたらタンザニアは、男子が3名（陸上2名、競泳1名）、女子が陸上1名の合計4名であった。ボリビアは、男子が3名（競泳、テニス、陸上各1名）、女子が陸上、競泳各1名で2名であった。両国ともアスリートを取り巻く環境レベルは似たり寄ったりと思えるが、タンザニアの場合は男子マラソンでアルフォンソ・シンブ選手が大迫傑選手とゴール寸前まで争い僅かの差で大迫選手（6位）に及ばなかったものの、シンブ選手が7位入賞を果たすという実績を残した。この選手は、2023年2月に実施された大阪マラソンでも優勝したエチオピア人選手とは、僅か18秒差の2時間6分19秒という素晴らしい記録で、3位に入賞した。イカンガー氏は、彼の出現を心から喜び、自分の後継者と考えているらしい。女子は、まだ世界トップとは差があるようだが、「Ladies First」から将来のオリンピックが生まれることを祈りたい。

④もうひとつふたつ、良い話を！

カントウータ55号の本連載（その3）に、水汲みの女性達と一緒に女子青年海外協力隊員が写っていたのをご記憶だろうか。ドドマでは、結構隊員たちをレストランや自宅に招待し、食事を共にして

いた。泊まってもらったこともある。彼らは、活動している地域の生の情報を持っているので、私はそれらの情報を頂いて出来るだけ仕事に活かすようにしていた。今でも何人かの隊員たちとは、Lineのやり取りをしているが、その中のT隊員は今は、東京五輪が取り持つ縁で、山形県長井市の職員として八面六臂の活躍をしている。



写真2-3 イカンガー氏が長井市を訪れた際に通訳を務める元タンザニア協力隊員T氏



写真2-4 タンザニアからの五輪選手をアテンド

五輪では、外国の選手団は、全国各地で選手村に入る前の合宿を行うが。山形県長井市は、タンザニア出身の市民が住んでいる等の縁もあり、タンザニア選手団の合宿地として手を挙げて、受け入れた経緯がある。これが縁で、長井市は、ドドマ市と姉妹都市関係となり、毎年10

月の市民マラソンに「Ladies First」参加者も含めて、複数のタンザニア人ランナーを招待するなど、友好を深めている。この関係を継続する為に、同市は、スワヒリ語が堪能な職員を必要とすることになったのだが、JICA事務所の紹介があったのだろうか、同隊員に白羽の矢が立ち、彼女は2019年秋から長井市に、「地域おこし協力隊」として赴任し、2021年4月から正式に長井市職員として採用された。

タンザニアからのランナーが来日する時には、彼女が受け入れ窓口として活躍しているが、毎回イカンガー氏も同行するので二人は、随分懇意になり、何と彼女が今年3月にママになった時に、イカンガー氏が赤ちゃん（女兒）の名づけ親になったという良い話もあったことを記しておきたい。因みにT元隊員は、ご主人も元隊員です。

2 中国のプレゼンス：メディア面での中国の影響

私は2018年6月11日に首都ドドマに移動し、ホテル住まいの後、7月13日から新居に引っ越した。自宅のケーブルTVを見て驚いた。私は、南アフリカの企業が運営するDSTVというケーブルテレビに加入したが月額800円ほどの一番安いメニューでも84chにアクセスできた。その内なんと10chが中国の放送局なのだ。英語ニュースが2ch、中国語ニュースが2ch、英語のニュースドキュメンタリーが1ch、仏語ニュースが1ch（マジで中国人キャスターも解説者も、仏語を自由に操っていた）、エンタ

メが1ch、中国の地方局（上海、江蘇、雲南）が3ch。アフリカにおける仏語圏の存在も意識して戦略的に構成している印象を受けた。戦時下の日本軍の行為を描いたドラマもちらほらチャンネルを変える度に目に入る。これを世界各国で放映しているのだろうか。

もう一つ驚いたのがメキシコのテレビ小説(Tele-Novela)が、ダルエスサラームでもドドマでも人気なことだ。メキシコのTV小説が中南米諸国以外の国で人気が出たのが確か、旧ソ連崩壊後の1990年代のロシアだが、その後どんどん世界に広がったようだ。このチャンネルでは終日スペイン語を英語に吹き替えて、沢山の作品を上映している。同じ映像ソフトを繰り返して各国で、稼げるので、さぞかし高い利益率で儲けていたのだろう。それに、ポルトガル語圏アフリカも意識して、ポルトガルとブラジルがポルトガル語放送を1chずつ設けている。

そして残念なことに一番高いメニューでもNHKが入っていない。ダルエスサラームのホテルでは、NHKの国際放送は、入るのだが少なくともドドマでDSTVと契約する限りではNHKを見る機会は無かった。何でこうなってしまったのだろう。ついでに韓国語放送もない。

3 タンザニア音楽事情

タンザニア赴任前、私が趣味で歌っている合唱団の一部メンバーから、アフリカの音楽・合唱事情をレポートしてね、と言われていたのだが、なかなか情報が

まともならず、3か月経過してしまった。着任当初は、街にそれほど音楽が溢れていない印象であったが、生活に慣れてくる内に、精神的に余裕が出来たのか、タクシーや露天商のラジオから聴こえる音楽が耳に入り始めた。結構、カリブ・ラテン系のBailable(踊れるダンス向きの曲)やラップが流れている。もともとカリブ(キューバ、ジャマイカ、バハマ、ベネズエラ等)に送り込まれたアフリカからの奴隷たちの音楽が、中南米の楽曲に大きな影響を与えたいが、それが現代のアフリカに還流しているという事だ。アフリカの民族の根は共通するのだと実感させられる。

合唱となると、教会の聖歌隊に限られてしまい、なかなか耳にする機会がないが、一度だけ、ダルエスサラームで、あるお宅に招かれた時、近所の教会から弾けるようなゴスペルの歌声が聞こえてきた。日本人には、逆立ちしても出せない声だった。その後、見本市の会場でコーラス込みのプロの演奏を何度か耳にしたが、結構上手い。特にソリストがシャウトして、バックコーラスがフォローするブラックミュージック独特の形式が色濃い。

スワヒリ語であろうと、歌詞の英語訳から判断すると、みな聖歌である。ただ私には、多くの歌が米国黒人霊歌と同様に、労働歌、作業歌から派生してきたように思える。

何れの団体もマイクを使っているのでベルカントは、意識せず余裕をもって自

然に歌っている。しかも楽しそうで、神に祈っているのか、空を眺め、祈りながら歌っている風情も感じる。ただ体格が良く、間違いなく声帯も大きく立派で、肺活量も豊かなのだろう。余裕がある素晴らしい歌声だ。特に高音部は、素晴らしい。

以下のコーラスは個人的にとっても素晴らしいと思ったグループの演奏で、Youtubeで聴けるのでご紹介します。

(1) LIGHT BEARERS, TANZANIA... Sifa Kwa Bwana

https://www.youtube.com/watch?v=0SeJJ4fk_ss

あまり米州大陸の影響は感じない。アフリカのながら洗練されたトーンだと思う。女声の高音部が美しい。

(2) 同じ団体の Pkea Sifa

<https://www.youtube.com/watch?v=ZHU1b-MwKRw>

男声のファルセットが印象的。動画の風景はタンザニアではないので、海外演奏旅行時の映像のようです。

まだ探せば幾らでも聞けると思うが、鼻歌を聴いてみても、タンザニアの人たちは、高い音楽教育を受けた訳でもないのに音感が良い、そして高音部を苦にせずフラット(b)しない。つまり音がぶら下がらない。もうひとつ、ソリストと一緒に歌ってみれば判るが、息が長い。ついていけない(私がダメなだけなのか?)。



写真2-5 筆者が通っていたキリスト教聖公会教会の聖歌隊



写真2-6 同じ教会の児童聖歌隊

スワヒリ語の発音は、日本語と同じで結構口腔の前部で発音するのだが、それでも、良く響くのは、声帯のちがいだろうか。職場の職員でも、歌えばいい声だろうなという人が、結構いるので、アフリカの人たちが素晴らしい音感と声の持ち主なのは、間違いないと思う。

(つづく)

3. ボリビア開拓記外伝

—コロナアオキナワ 疫病・災害・差別を生き抜いた人々—8

日本ボリビア協会相談役

渡邊 英樹

第三部 ジャングル開拓最前線

原始林の中の生活

もうどくせいぶつ
猛毒生物

ジャングルの中での野宿も何度か経験

した。まず、焚き火で夕食を作る。

夕食といっても発売されたばかりのカッ

プラーメンが一番のごちそうであった。

たまには、川のよどみに小枝を投げて、

虫が落ちたと勘違いして浮いてきた魚を

目がけて散弾銃を撃ち、捕れた魚を枝

に刺して焼いて食べた。デザートは桃缶

にしていた。食べ終わった缶に川の水を

くんできて、インスタントコーヒーを投

げ入れてコーヒーを沸かすのにちょうど

良い大きさであったからだ。



写真 3-1 散弾銃で魚を捕る(1977年筆者撮影)

そして木と木の間にハンモックを吊って
ピストルを首の下に入れて眠りにつく。

テントは蛇やサソリが潜り込んでくる
危険があるから使えない。蚊もいない乾
期のハンモックは慣れてくると快適だっ
た。時々吹いてくる涼しい風に癒やされ
るし、こぼれんばかりの満天の星を見上
げ、悠久の自然の中の己の小ささを感
じつつ、こんなにも頻繁に現れるのかと
驚きながら流れ星を追ったりできるから
である。

とはいえ、用心を怠る訳ではない。ジ
ヤングルに入る時の携行必需品の一つは
カスカベル（ガラガラ蛇）の血清注射で
ある。蛇は警戒心が強いので、通常は蛇
の方で我々の出す物音で逃げしてくれるの
で、出合い頭の運の悪さを除けばそう
頻繁にかまれるものではない。それでも
いろんな毒蛇をよく見かけるので侮れな
い。夜、虫の鳴き声に混じってガラガラ
蛇のシュルルルという尻尾を振る音が聞
こえてくることもある。用を足すときは
焚き火の中から燃えさかる枝を一つ取っ
て投げたおいて、その場所へ行って
放尿した。サソリに一番やられやすいの
は脱いだ靴にうっかり足を入れた時だ。

私の仲間も何人かこれでやられている。
靴は履く前に逆さにして、叩いてから履
くのが鉄則だ。毒グモタランチュラはよ
く見かけたが、これにやられた仲間はい
なかった。

川に入った時、気を付けなければなら
ないのは、ピラニアの他には川エイだ。
濁った川底にいるエイを踏んだら、その
尾の猛毒にやられる。現地の人たちは
「シエテディア（七日）」と言った。や
られると7日間、苦しむらしい。

私が一番苦手としていたのはヒアリで
ある。暗いところでは、隊列をなして
移動しているのが目に入らない。その
隊列の上に足を置いてしまったことが、
二度あった。こんな小さいアリがどうし
てと思うほどかみ付かれたら痛い。数匹
に這い上がられるので、足のあちこちを
キリの先で突っつかれたような痛さに思
わず飛び上がる。そして、数分もたつと
ノドのあたりが痒くなったと思ったら、
全身にジンマシンが出て一晩中苦しむこ
とになる。昔は、ヒアリのいる木に縛り
付ける拷問があったといわれるだけのこ
とはある。もし、数十匹にやられたら
自分も死ぬだろうと思った。こうした

かんきょう た
環境に、かろうじて耐えられたのは、

わたし せんぜん う
私が、戦前生まれであったからだ。

せんご にほん のうぎょう
戦後もしばらくは、日本の農業でも、

じんぶん ひりょう にほんじゅう
人糞を肥料としていたので、日本中い

か
たるところにハエ、蚊、ノミ、シラミが

がっこう あたま くじょ さつちゅうざい
いた。学校で頭にシラミ駆除の殺虫剤

こな せだい
DDTの粉をかけられた世代である。

えき びょう
疫 病

ちょう せきり ほっせい
マラリア、腸チフス、赤痢の発生は

ひんぱん こううん りびょう
頻繁にあったが、幸運にも罹病すること

わか ひと がたかんえん
はなかった。若い人はA型肝炎によくか

かった。

ねん へじ
1980年から始まったボリビアのサ

し こくさいくこうけんせつ
ンタクルス市のビルビル国際空港建設の

にほん せんぱつたい
ために、日本からやってきた先発隊の

ぎじゆつしゃ たいはん かんえん じぎょう
技術者の大半がこの肝炎にやられて事業

ししょう き なまやさい
に支障を来たしたことがあった。生野菜

みず げんいん おお かんえん
や水が原因になることが多い。「肝炎は

くすり かんたん なお ほんとしかん せいよう
薬で簡単に治らず半年間くらいの静養が

ひつよう じぎょう しんてん おお しょうがい
必要になるため事業の進展に大きな障害

ちゅうしゃ かんたん なお せいびょう ほう
となる。注射で簡単に治る性病の方が

せきにしや なげ
ずっとましです」とその責任者が嘆いて

せきにしや い わたし
いた。その責任者が言うには、私のよう

しょうわ ねんいぜん う にんげん
な昭和20年以前に生まれた人間は

だいじょうぶ りゆう たず
大丈夫なのだという。理由を尋ねると、

かいちゅう がっこう むしくだ
おなかに回虫がいて、学校から虫下しの

くすり はいきゅう せだい こうたい
薬を配給された世代には抗体があるの

だそうである。

ことほどさように、さまざまな

びょうちゅうがい きんねん
病虫害があったので近年まで、ポリビ

じん あし ふ い
ア人でさえ足を踏み入れようとしなかつ

たのがサンタクルスの未開の土地であつ

た。

にほんじん はい と
そこに日本人が入ったのである。捕れ

なん た やまや
るものは何でも食べた。山焼きをして、

う たんすいかぶつ
ユカ（キャッサバ）を植えれば炭水化物

もんだい どうぶつせい
はなんとかなる。問題は動物性タンパク

しつ しいく たまご とりにく
質である。ニワトリの飼育で卵と鶏肉に

にゅうしょくとうしょ と
ありつけるまでは、入植当初は、捕れ

なん た
るものは、何でも食べたという。しかし

に どう
サルはうまくなかったので、二度と撃た

はなし いくにん ひと き
なかったという話は幾人かの人から聞い

た。



写真3-2 捕獲して海外移住事業団サンファン事業所の職員宿舎で飼っていたイグアナ（1970年筆者撮影）

オキナワ中央病院を訪ねた時のこと
 である。庭に大きなイグアナが入りこん
 できた。それを見つけたかわいい顔をし
 た看護婦さん2人が棒を持って「おいし
 そう」と言って追いかけて行ったので、
 入植初期の食糧事情が察せられた。
 聞けば「鶏肉に近い味でおいしい」と言
 う。「鳥類の先祖は、恐竜」という説
 に思わぬところで納得させられた。
 山の肉の経験は、私にも多少ある。夜
 ジングルの中をランドクルーザーを走
 らせている時に、ヘッドライトの先で前
 を横切る動物を見て、「ゾウだ」と叫ん
 でしまった。南米大陸にいるはずもない
 ゾウとってしまうほど鼻の長い大きな
 オオアリクイであった。一度だけ、この
 肉を伐採業者のキャンプでごちそうにな
 ったことがある。コンビーフ缶の肉のよう
 なほつれ方をした黒っぽい肉で、脂肪も
 少なくパサパサとしていて、お世辞にも
 うまいとは言えなかった。
 山バトやシカはごちそうである。シカ
 は優しい味で万人向きであるが素早いの
 で、そう簡単に捕れるものではない。
 一度、4人で追って浅い草むらに逃げ込
 んだのを確認して、四方から追い詰めた

が、なかなか見つからない。わずか15
 分ほどの草丈なのに全く分らない。

包圍を狭めていったらいきなり目の前で
 2人くらい飛び上がってジグザグと身を
 交わして逃げられてしまった。いたずら
 に発砲したら仲間を撃ってしまう危険が
 あったからだ。

やっと射止めた獲物は原生林の中の
 農家に持って行ってさばいてもらった。

さばいている最中に、少年がすばや
 く蹄をポケットの中に入れるのを見て、
 問いただすと2~3日たってから腐る
 直前に食べるのが一番おいしいと言う。
 この辺の味覚になると、もうついていけ
 ない。

こういう体験をしていると「食事をす
 るという行為は、他の生き物の命を絶つ
 ていることだ」と胸にズシリとくる。生
 き物に対する畏敬の念は、きれいに小さ
 くカットされたものばかりを食べている
 我々より、ずっとこの少年の方が強く持
 っているに違いないと思った。

山の肉で一番おいしいのはホッチダと
 思う。コロニアサンフアンの入り口のヤ
 パカニ川畔にある野生動物専門の小屋に
 家族連れで食べに行ったことがある。妻

がなかったら、日本への郷愁で精神的にまいってしまったかもしれない。婦人雑誌の料理の写真を見たときには、アジやサバの夢をみた。移住地にいる事業団職員の、つわりで苦しむ奥さんに「欲しいものがあったら買って来ますよ」と言ったら、「イカの煮付けが食べたい」と言われて困ったこともあった。

海の魚ではないが、両コロニアともリオグランデとヤパカニ川の恩恵を受けていた。「ヤパカニ川があったから、ここにとどまる決意ができた」と語ってくれたサンフアン移住地の方がいたが、川で捕れる魚は、食べ物への郷愁を和らげてくれ、かつ釣りの醍醐味によって、日々の労苦を一瞬忘れさせてくれたに違いない。



写真3-5 スルビ (1969年筆者撮影)

しかし、コロニアオキナワでは、一挙にたくさんの魚を捕ろうとしてダイナマイトを使った時に、誤って自分の腕を失ってしまうという悲劇も起きている。

一番よく釣れるのはオオナマズのスルビである。大きいものだと棒にくくって2人で担いで尻尾が地面につくものもある。我が家では、妻が1匹買ってきてミンチにかけ、これにニンジンやタマネギのみじん切りを加えて「がんもどき」にして食べた。これは唐揚げにしてもおいしい。「白身魚のあんかけ」として中華料理風にすると一段とおいしくなった。

金色のウロコを持つドラードは、川魚を生で食べる危険も顧みず、刺し身恋しさで生で食べた。鯉の洗いに似た食感と味であった。

このように、入植当初は、食物一つとっても原始的な生活を強いられた。「もし、あんなところを日本人が開拓したら、サンタクルスマチャカの街中を逆立ちして歩いてやる」と現地の人に言われた移住者もいた。それを思う時、今日の「米の里」コロニアサンフアンと「小麦の里」コロニアオキナワの発展は奇跡的な出来事に映る。あらゆる艱難辛苦に立

む かいたく そうぜつ たたか いど
ち向かい開拓という壮絶な闘いに挑み、
こんにち ゆうすう こくそうちたい きず
今日、ボリビア有数の穀倉地帯を築いた
コロニアの皆さんの勇気と不屈の精神に
は、ただただ頭が下がるばかりである。

(つづく)

ちゆうき しゃしん ず
注記：これまでの写真および図は「コロニアオキナ
にゆうしょく しゅうねんきねんし いんよう
ワ入植50周年記念誌」から引用。
ほんしよ せいひと
※本書は、日系2世の人たちが読みやすいように
ぜんかんじ
全漢字ルビをふっています。



琉球新報社のご厚意で転載させていただきます。ご関心を持たれた方は下記琉球新報社URLをご覧ください。

<https://store.yukyushimpo.jp>

★スペイン語版が発刊されました☆

本誌で『ボリビア開拓記外伝』（琉球新報社 1900 円+税）の小分けの連載（全漢字ルビ付き）をしておりますが、そのスペイン語訳本『BOLIVIA REGISTRO DE UNA HISTORIA PARALERA』が、明石書店(2500 円+税)より出版されました。



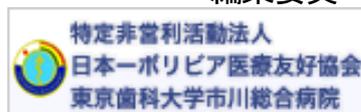
訳者の大城ロクサーナ氏と筆者

編集委員

椿 秀洋 細萱 恵子 大川 裕司

◎日本ポリピア協会維持会員一覧◎

編集委員



細萱



Copyright© 2002-2024

一般社団法人日本ポリピア協会
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA